

観音物語 (21) 光のシャワー

むくしょうじょうこう えにちはしょあん のうぶくさいふうか ふみょうしょせけん
無垢清浄光 慧日破諸闇 能伏災風火 普明照世間

無垢清浄の光ありて 慧日は諸の闇を破り 能く災いの風火を伏して 普く明らかに世間を照したまう

夜明け前の空が微妙かつダイナミックに変容している。しかし、西にゆくほど空の色は深くなり、西空はまだ真っ暗。群青の夜空に星屑が残留している。反対側の東空は、まるで生き物が徐々に現れてくるように、空の明るさが刻々と膨らんでいる。

東空がすっかり明るくなった。

巨大な生き物が姿を現われてくる気配がする。

西空はまだまだ深い群青色のままであるが、星が一つ一つ消えていく。東の巨大な生き物に食いつぶされるようにして星の数が次第に減っていく。その生き物が姿を現すあたりから急に眩しくなった。そのとき、一条の光が天空を射した。

日輪だ！

日輪は二、三分で空中にぽっかりと空中に浮かんだ。

渦巻く真紅の日輪に拍手を打つ。そして手をあわせて礼拝した。

「ナム カンゼオンボーサ」

「ナム カンゼオンボーサ」

「ナム カンゼオンボーサ」

そのとき、市街地のいたるところから黒いモノが煙のように立ち昇った。街の陰からあわてふためいて逃げている様子だ。それは悪魔だった。黒い悪魔たちが観音菩薩の清浄光に当てられて逃げ出しているのだ。路地や家々にひそんでいた悪魔が、観音菩薩の光を嫌がって逃げている。菩薩の清浄なる光が、あらゆるものごとの裏と表を照らして闇を破っている。悪魔たちはたまらなくなり、一目散に逃げ出している。

悪魔たちは逃げ場を失って光に吸い込まれていく。苦しみや悩みをつくっている黒いモノノケが、闇から逃げ出していく。観音菩薩の光のシャワーを浴びて、黒いモノノケが逃げ出している。あわてふためいて転倒するモノノケもいる。眼を塞いで地に伏しているものもいる。頭を隠して尻だけが見えるものもいる。地上の家々や路地から数えきれないほどの黒いモノノケが逃げ出している。黒い煙のようになって空へ巻き上げられ、光に吸い込まれていく。

光はあらゆる壁を突き破って通り抜けていく。闇に隠れていた悪魔たちは光よって容赦もなく照らし出される。いじめの犯人へ観音菩薩の清浄光が鋭い剣の波長となって突き刺している。これまでいじめられて苦しんでいた人たちの顔がみるみるうちに明るくなった。

「これで私はもういじめられない」

死ぬほど苦しんでいた少女は母と一緒にうれし涙を流している。自殺を思いとどまった会社員は眼を真っ赤にして身震いをしている。これまで耐えてきたことが周囲の人たちに理解されて感極まってしまったからだ。無視したり、薄笑いしたり、陰口をたたいていた人たちも再び友だちになった。

観音菩薩の清浄光は世間の闇を照らし、陰湿ないじめのからくりを明るみに現わした。両手をいっぱい空にかかげ、その手で光をつかみ、胸に引きよせれば、観音菩薩と一心同体になる。無垢にして清浄なる観音菩薩の慈光は、あらゆるいのちを陽気にさせてしまう。

慧日の光に両手をあわせれば、たちまちエネルギーが集中してくる。深く暗い悩みの淵に溺れている人も、生きる活力が湧いてくる。観音菩薩の光にすなおに合掌しているだけで、心が軽くなってしまふ。日輪は天高くなってますます輝きを増してきた。